

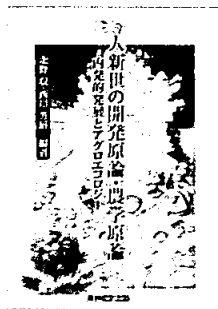
BOOK INFORMATION

自然と人間、土と人間の視点から問う 人新世を生き続けるための2つの原論

「人新世の開発原論・農学原論 内発的發展とアグロエコロジー」では、時代の変化に伴い新局面に入った「内発的發展論」をアグロエコロジーの概念から吟味し直している。総勢8人の国際協力の実務経験者がつづる論には多くの学びがある。編者の一人である龍谷大学教授・西川芳昭氏が本書の読みどころを紹介する。

本書は編者2人の共通体験である学生時代（1980年代）の問題意識と社会学者「鶴見和子」との出会い、それぞれの行政官・JICA職員としての実務経験、研究者への転身と国内外フィールドでの学び、新自由主義とポストコロナ時代への想いなど、40数年間の研究と学びの軌跡をつづった「研究書」であり「物語」でもある。さらに、編者の同僚、研究仲間、教え子など仲間たちとの出会いに感謝する協働・連帯の書でもある。著者陣には現役のJICA職員を含め、国内外の開発実務家と開発研究者が集い、先進国を含めた農村開発の現場で考えた人々が主体となる足元からの発展のあり方を、多様な言葉でつづっている。

本書の縦糸は人新世を生き抜く



人新世の開発原論・農学原論
内発的發展とアグロエコロジー

北野収・西川 芳昭(編著)
農林統計出版
2,500円+税

ための二つの原論である。一つは、人間の生存基盤という視点からの「農学原論」。そしてもう一つは、「世直し」の主体としての人間の主体形成論の観点から内発的發展論に着目した「開発原論」だ。横系には、北米、フランス、ネパール、モザンビーク、タンザニア、日本などでの経験が紡がれる。

第1部は、「あの国、あの人たちは「遅れている」のか」をテーマに、モザンビーク農民の生活世界にみる性・生計・裁判とネパールの歴史都市とキー・パーソンにみる内発的發展を取り上げ、先進国と言われる国々の人間が作り上げた開発観の偏りと偽善性を明らかにする。

第2部の、「農業・市場・社会」では、タンザニア・モロゴ州での農家調査を基にした貧困軽減と食料安全保障の手段としての有機農業、日本の有機農業における贈与と脱商品化について議論している。社会的農業を推進するイタリアの例やフランスのアグロエコロジーも紹介され、開発原論や農学原論は先進国の社会の未来をも見据えていくことが重要だと強調している。

第3部では、「内発的發展と食料主権」という政策目標で捉えられる「食料安全保障」とは根本的

に異なる概念として、市民社会が作り上げる「食料主権」の事例が紡がれている。コミュニティ支援型農業（CSA）の実践による越境する持続可能な社会形成や、JICA国際協力専門員が大分県の水俣とタンザニアの地方自治に見た「本当の幸せ」のための開発と発展を紹介している。

これらの事例を踏まえて、最後の2章で編者らの到達点を記した。北野は、農民教育と農業国際協力の父とも言われる中田正一氏を「シビック・アグリカルチャー」の提唱者トーマス・ライソンと結び付けて、さらには南米やアフリカへと時空を超えて越境する農的連帯についてそのメカニズムを語る。筆者（西川）は、内発的發展論を、人間を含めあらゆる生命の歴史を読みとる「生命誌論」と関連付け、農業の本質が同じ生物である動植物と人間の相互関係の上に成り立つ互恵的なものであることを前提とした発展・展開としての開発を論じている。

本書を通して、開発の実務者や開発に関わることを目指す学生の皆さんに、政策実践や運動論としての内発的發展論とは異なる「土と人間」の視点から吟味する開発原論・農学原論の世界にぜひ触れてほしい。